

保 育

感じ考え試しながら遊びを創る楽しさを味わう

— 4歳児のめいろ遊びの実践を通して —

掛 志 穂

1. はじめに

年度当初のことである。入園してきたA女（4歳児）に「お外に出て遊ぼう」と声をかけると、「いやだ。おもしろいものがないもん」と言って、お絵かきを始めた。まだ園生活に慣れていないせいもあると思うが、A女の「おもしろいものがない」という言葉が気になった。A女のいう「おもしろいもの」とは何かと聞いてみると、「だってね、ぶらんこはあきたし、いいのがないもん」と言う。A女に限らないが、最近ではテーマパークに行っているいろいろな刺激のあるもので遊んだ話をよく聞く。テーマパークの遊びは、客をいかに喜ばせるかが研究しており、行けば楽しめるようになっている。しかし、園の環境はそうではない。乗るだけや見るだけで楽しませてくれるものではなく、自分からすすんでかかわっていくことで楽しさが生まれてくるのである。「ぶらんこにあきた」というのは、ぶらんこへのかかわりかたが単調になっているためではないか。「いいのがない」というのも、同じくかかわりかたが単調になり、遊びを想像して創り出すという感覚がまだ育っていないのではないかと捉えた。森上（1986）は、「4歳児は彼らの中に隠されていた能力が、あらゆる方向を目指して急激に伸びていく時期、多芸多才で何にでも首を突っ込んでやりたがる『やりたがりや』である」¹⁾ と言っている。本来そのような力を秘めている子どもたちがその力を発揮できるようにするにはどのような環境や教師のかかわりが必要なのであろうか。そこで、テーマを設定し教師としてどういう環境づくりをすることが大切なのかということについて研究をすすめるこ

とにした。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

4歳児は一般的に自我が伸びる時期であり、興味があることに自分なりにかかわってみようとする時期である。だからこそこの時期に身近なものへ積極的にかかわり、自分なりに感じ考え試すことを繰り返すことで、遊びを創る楽しさを味わわせたい。そこで今回の研究において、めざす子どもの姿を次のように設定して研究をすすめることにした。

感じ、考え、試すことを繰り返しながら、遊びを創造していくことを楽しむ子ども

(2) 具体的方策

めざす子どもの姿に向けて次のような具体的方策を考え、研究を進めていく。

- ・心揺さぶられるような環境構成や教師のかかわり
- ・興味や関心をもったことに繰り返しかかわれるような環境構成と教師のかかわり
- ・子どものイメージや考えを広げるような環境構成や教師のかかわり
- ・子どもたちが主体的に活動している姿を見取り見守りながら、遊びを広げたり深めたりするための環境構成や教師のかかわり

3. 実践事例（4歳児 11月）

実践例1「本の迷路をつなげる」

～迷路間のイメージを広げる子どもたち～

保育室には裏表紙が迷路になっている月間絵本がある。子どもたちはまとまった活動の前やお弁当のあとなどの時間に数人が集まって迷路を楽しんでいる。また、その本の毎月の迷路をつなげると長い迷路になることを発見し、4月号から数冊ずらりと並べて遊ぶ姿もよく見られていた。

全員が集まったときに2冊の迷路をつなげて遊んだあと、迷路と迷路の間を少し離して「こうなったらどうする？」と聞いてみた。すると子どもたちは「えー！ジャンプする」「空飛んで行く」とどうにかしてつなげてみようという思いを言い始めた。迷路の間をもっと広く開けて「こんなに離れたらどうする？」と聞くと、「すごーくジャンプする！」「飛行機でいく」「ひもでつなげる」など、やはり何とかつなげようという思いを言い始めた。その日は「なるほどー。おもしろいねえ」と子どもたちの思いを受け止めた。

次の日、離れた迷路を何とかつなげたいという子どもたちの思いを実現しやすくするために、本の迷路をカラーコピーし畳一畳ぐらいの段ボールの端と端に貼り付けておいた。そばにマジックや色鉛筆を用意した。段ボールに貼ったということで、迷路をつなぐ方法としてジャンプするというよりは、目に見える形の線でつなぐことでいろいろな迷路の線が工夫できるのではないかと考えたからである。早速、登園したB男が「迷路がある！えー、これ離れとるじゃん。わかった。こここうやって書けばいいじゃん」と言い、身支度をすませて迷路を書きはじめた。しかし、ある程度書いたら「外で遊んでくる」と言って出て行ってしまった。数人が同じように迷路を書いていたが、そこから遊びが広がる様子は見られなかった。

その後、他の子どもたちに「この迷路離れたのをB男君たちがつなげてくれたんだけどどうする？」と聞くと「海にすればいい」「青をぬってねー」「いろんな色の海にしたらどう？」「魚も

つくろうや」などイメージはどんどん膨らんでいった。迷路をつなげるというよりも迷路と迷路の間を海にするという発想で、いろいろな色のタフロープや紙テープを切ったもので『海』を埋め尽くし始めた。そのうちに、タフロープや紙テープで埋めた海の中に体をつっこんだりタフロープを上を放り投げて上から降らせてみたり遊びが盛り上がり過ぎていった。片づけの時間が近づいたので「そろそろ片づけようか」と声をかけると「えー、まだ遊びたい」と言っていたが「また遊べるようにこの箱に入れとこうや」と言うと片づけ始めた。

【考察】

本の迷路をつなげて遊びを広げていこうとするために、迷路と迷路の間を広げるというやり方は、子どもたちの心が揺さぶられ迷路のイメージを広げるためにはよかったと考えられる。しかし、そのイメージから生み出された「こうしたい」という思いを実現させる段階で、子どもたちの発想は教師の見通しとは違う方向へすすんでいった。そして、思いの実現に向けて、自分たちで考えて普段から使っている材料を利用していった。それは、子どもの実態のとらえ違いをしていた（迷路を作る過程よりも迷路をたどってゴールするというところに興味があった）ために、子どもたちの興味が迷路ではなく迷路のイメージを広げるための素材そのものに移ってしまうという姿となったと考える。このことから、実態把握をもとにした環境構成や教師のかかわりの重要性を改めて感じた。



図1 様々な材料で迷路のまわりを海にする

実践例2「秘密の道で迷路づくり」

～裏庭の空間を楽しむ子どもたち～

保育室の裏には、保育室と倉庫をつなぐ緑の道がある。緑の道は30センチ×30センチのジョイント式人工芝をつなげているものだ。緑のマットの下には子どもたちが好きなダンゴ虫などがいるので、マットをひっくり返し虫探しをしてそのままにしてあることがある。この日はC男たちがマットをひっくり返して虫探しをしていた。倉庫に行く道がなくなり困ったので「困ったなあ。秘密の道がなくなったから倉庫に行けないなあ」とつぶやいていると、「秘密の道？ぼくがつなげてあげようか」とC男が声をかけてきた。「うわあ、うれしいわあ。ありがとう。じゃあね、ここから倉庫まで緑のマットをつないでほしいんだけど。大変だけどできるかなあ」というと「まかせといて」と言って友だちと道を作り始めた。しばらくして「先生、できたよ」の声に行ってみると、倉庫にはつながっていたが、まるであみだくじのように楽しい道になっていた。C男たちもおもしろがって「迷路みたいだね」と言って遊びはじめた。この秘密の道での迷路づくりは、保育室の裏で遊ぶ子どもたちによって、だんだん発展していった。「ゴールを決めようや」と言って、紙で旗を作り木の幹に張り付けていたり、「ここは石の道」と言って大きな石をたくさんつなげたり「この石はお城なの」と言って石を積んでみたり、長いレンガを持ってきて「ぐらぐらするけ、これは罨なんよ」と罨らしきものを作ってみたり、他のクラスのマットを借りて表の庭につながる一本道を作ろうとしていたりした。しかし、表に行くには緑のマットは数が足りないで、裏庭にほぼ一直線に迷路ができていった。

【考察】

裏庭の迷路づくりのきっかけは、倉庫への道を「秘密の道」とつぶやいたり「大変だけどできるかなあ」と子どもたちの意欲をかきたてるような教師の声掛けだと考えられる。

また、裏庭での迷路づくりが発展していったの

には次の要因があると考えられる。まず、裏庭というところが教師の目が常にあるわけではないので、子どもにとって自分たちだけの秘密の空間であるということ。そして、木や石などの自然物があることで、迷路づくりに繰り返しかわることができるという魅力的な場所であるということである。この秘密の空間に心を揺さぶられたと考えられる。このような環境を意図的に設定し大切にする必要があると捉えた。



図2 裏庭にほぼ一直線にできていく迷路

実践例3「段ボールで迷路づくり①」

～主体的に活動する子どもたち～

月刊絵本の迷路を段ボールの端と端に貼り「この続きがないねえ。どうしようか」と投げかけると「部屋の外にずうっと迷路つづけたらいいんじゃない？」とB男が言った。他の子どもたちも「それいいねえ」と言い、傍においていた段ボールを見つけて「先生、これ外に使ってもいい？」と聞くので「いいよ」と言って下駄箱の近くに段ボールの切れ端を入れたコンテナを置いた。B男はセロハンテープをかかえてせっせと段ボールをつなげていっている。D男が「段ボールどんどんもってきて」と言い、E女とF女も段ボールを運んで置いていっている。そのそばを飛び跳ねるようにG男が「忙しい忙しい」と言いながら段ボールをせっせと運んでいた。B男が「セロテープじゃあはがれるよ」と言いに来たので「ビニールテープもあるしガムテープを使ってもいいよ」というとビニールテープとはさみを持って行った。保育

室からずいぶんつなげていったところで、段ボールがなくなった。G男が「先生、段ボールがなくなった。何かない？」と聞いてきたので、「空き箱を使ってもいいよ」というと「ありがとう」と言ってさっさと空き箱を運び始めた。「Eちゃん、Fちゃん、空き箱いいんだって。持ってきて」と指示を出しながら迷路の先のほうに走って行った。

しばらくして、またG男が「先生、もう箱ない？」というので用意していた廃材箱を見てみた。中は空になっていた。「ないねえ。何か代わりにするものないかなあ」と言うと、G男はD男を呼んできてもう一つの廃材箱の中を二人で探し始めた。そのうちD男が「先生、これもらっていくね」と言って、トイレットペーパーの芯をたくさんかかえてG男と行ってしまった。

B男とE女とF女は段ボールがずれないように一生懸命ビニールテープで留め直していた。「この迷路もう通ってもいいですか？」と聞くと、E女が「いいですよ」と言うので「靴で通ってもいいんですか？」と聞くと「お部屋のシューズか靴下で通ってください」とE女が答えた。シューズを脱いで靴下になり保育室から段ボール迷路に移り進んでいった。段ボールの感触が気もちよかったので「EちゃんFちゃん気もちいいねえ」と言うと「気もちいいでしょう。わたしたちも通ろ！」と言って一緒に迷路を進んでいった。段ボールがだんだんなくなり空き箱やトレーなどの道になっていった。最後のほうに両脇にトイレットペーパーの芯がずらりとならべてある道が現れた。その中をそうと通っているとG男が「そこは橋なんだから静かに通ってよ」と忠告した。静かに通ってもトイレットペーパーの芯は倒れてしまう。G男は「もう、町作ってるのに」と怒っていたが夢中で芯や廃材で町らしきものを作っていた。ちょうど行き止まりだったので、芯を直しながらスタート地点に戻った。「楽しいねえ」とF女。「楽しいねえ。みんなにも教えてあげようよ」というとE女が「ねえ、こっちきてみ。おもしろいよ」と他の子を誘い出した。数人の子が「なにになに？」とやってきて靴下になり迷路を進み始めた。しか

し、トイレットペーパーの芯のところでG男に「もう、倒さんとして。まだ作ってるの！」と怒られていたが、引き返しながら「おもしろいねえ。もう一回やろう」と何回も迷路を楽しんでいた。そのたびにG男は「もう倒さんとしてってよるのに」と怒りながら続きをどんどんつなげていった。



図3 トイレットペーパーの芯の町

【考察】

G男はトイレットペーパーの芯を橋に見立てて園庭に大きな町を作ることをイメージしていた。だからこそ、他の子が倒しても怒りながらも町を作り続けていったと考えられる。G男のイメージを教師はもっと受け止めて声掛けをすれば、怒るのではなく、楽しくイメージを広げることができたのではないかと考える。

段ボールの迷路づくりで夢中になって作り続けることができた要因は次のことが考えられる。まず、外に大きな迷路を作るという心揺さぶられる活動であったということ。そして迷路を外につなげたいという思いがあったときにすぐ傍に段ボールの切れ端が用意してあったことである。またそれが同じ形ではなく、大小様々で正方形や長方形、かぎになっているものなど多種多様であったため、興味が持続し繰り返しかかわることができたのではないかと考える。それと、段ボールがなくなったときに他のものを利用できるように廃材を用意していたことで、イメージが広がっていったと考える。あえて不十分な数を用意しておくことで工夫が生まれると考えているので、今回は欲しいも

のが揃わない中で自分たちなりに工夫をして迷路を作り続ける姿が見られたのは、材料の数量や形など見通しをもって準備していたのがよかったと考えられる。

実践例4「段ボールで迷路づくり②」

～年長児の考えに触れる子どもたち～

実践例3の後日、B男が段ボールで迷路を作っていると、年長児がきて「なにしょうるん？」と声をかけてきた。「迷路作りょうるんよ」とB男が答えると「手伝ってあげる」と言ってどんどん段ボールを運び始めた。すると周りにいた年長児が次々に「何しょうるん？」と言って入ってきた。年長児にとっても迷路づくりは楽しいらしく、どんどん迷路がつながっていき、とうとう築山まで進んでいった。B男も一緒に楽しんでいる。しかし、そうなると段ボールや廃材も少なくなりつなげるものがなくなってきた。「どうする？もう道が作れんよ」というと、B男が「こうやってね、少し離れたらいいんよ。でね、ここはジャンプするんよ」と教えてくれた。見ると年長児も自然にそういうように並べてジャンプして通っていた。

築山の斜面では、土がすべるので箱を置いて道を作っていたが、箱に足を入れたとたんずるずると滑ってしまう。すると前を歩いていた年長児が「先生、引っ張ってあげる」と助けてくれた。教師の後ろにいたB男も斜面で滑るので引っ張ってやると、次々と斜面では前の子が後ろの子を引っ張ってやるという姿が見られた。

築山の斜面を登り滑り台を滑ると道がなかった。B男と「困ったねえ」と言っていると、年長児が大きな葉をとってきて途中の道までつなげてくれた。それを見たE女が「いいねえ」と喜んでた。

【考察】

段ボールや廃材などを外で使うためにコンテナに入れてテラスに置いておいた。そうすることで使いやすく何回も繰り返しかかわろうとする意欲が持続できたと考える。また、主体的に活動するために、子どもたちががすることを見守りながら共

感したり、困ったという気持ちを伝えたりしていった。そうすることで、自分たちなりに考えることにつながったと考えられる。また、年長児の工夫する姿を間近で見ることで、年中児もアイデアがたまっていくと考えられる。



図4 築山までつながる迷路

実践例5「カラー段ボールで迷路づくり」

～思いを実現した子どもたち～

まとまった活動の時間に、クラスだけで迷路遊びをしたとき、保育室の表と裏をどうしてもぐるりとつなげてみたいとA女が言った。今まで使った段ボールは残念ながらもうぼろぼろになっており使えるものはジョイント式人工芝しかなかった。A女は年度当初「ぶらんこはあきたし、おもしろいものがない」と言った子である。どうしても願いを叶えてやりたかった。そこで、カラー段ボールを出すことにした。

「こういう大きい段ボールがあるんだけど、これ使ってみる？」と聞くとA女は「うんうん！」と喜び、A女と仲の良いH女も「みんなー、いいのがあるよー」と他の子に声をかけた。新しい素材があると子どもたちの意欲は高まるようで、クラス全員が何枚もカラー段ボールを運び、クラスの前から順番につなげていった。全部運び終わったころには、ほとんど全てつながっているほど子どもたちは力を合わせて迷路を作っていた。並べた様子をよく見ると、何枚もカラー段ボールが重なってしまっていたり、つなげるには足りなくて間がととも開いていたりするところもあった。

「どうしようか」というと、「こうすればいいんじゃないん?」と言って、重なったものを足りないところへ持っていく姿もあった。それでもつながらないところがあったので、教師が「こうやってみようか」と言って、カラー段ボールの間を少し離して開けていくと、「いいねえ」と言ってカラー段ボールの迷路の上をジャンプして通り始めた。そのようにして保育室からシューズのまま迷路の上を歩いて園庭を抜け裏庭へ行き裏から保育室に戻ると一周できる迷路がついに完成した。「やったあ、やったあ」と言って喜ぶ子、できたことに満足して他のところへ遊びに行く子、保育室の前のほうの迷路だけで遊ぶ子など、思い思いに遊んでいた。I男が「一周してきた!」と言ったので教師も「一周まわってこよう!」と迷路を走り始めた。すると、友だちとぐるぐる何周もまわる姿、ひとりで走り抜ける姿、迷路の途中でだれかに会うとじゃんけんをして負けたら引き返すという遊びをする姿など、それぞれが自分なりに楽しいと感じることをして遊ぶ姿が見られるようになった。

【考察】

遊びを創る楽しさを味わうことができた活動であったと考えられる。要因としてはまず、カラー段ボールという新しい素材が出てきたことで心揺さぶられる活動になったことと、4歳児にとっては扱いにくいものであったにもかかわらず、一周できる迷路を作りたいという思いと新しい素材を使ってみようという思いが重なり、今回の活動につながったと考える。また、一周つなげるためにカラー段ボールの重なりやつながっていないところを子どもたちと一緒に考えたりやってみせたりすることで、迷路が出来上がっていく楽しさを子どもたちが感じたと言っている。そして、繰り返しかかわれるようにI男の「一周してきた」の言葉を受けて教師が一周することで、他の子も興味をもち何回もまわることを楽しみ始めたと考えられる。また、できあがった迷路を何周もする楽しさは、途中でジャンプするところがあったりじゃ

んけんをすることができたり友だちとぼったり会う楽しさがあつたりと、通るたびにいろいろな楽しさがあるためと考えられる。

4. おわりに

今回は迷路というよりは道をつなげるという活動となったが、ただ道をつなげるだけでも子どもたちにとっては楽しく、青空のもとで自分たちが作った道を走り回るといった気持ちよさを感じることができたと思っている。

子どもたちの様子から複雑に迷路を発展させるよりも、今は単純に道をつなげ所々に寄り道があるぐらいのものの方が、わかりやすく誰でも参加しやすいと感じた。もう少し年齢が上がると複雑なものを好んでいくのであろう。

また、遊びが発展するには、子どもたちにとって扱いやすい大きさや材料がある。それを見極めながら環境として用意しなければならない。今回のカラー段ボールは子どもたちの心を揺さぶるものとしてはよかったが、遊びを持続させることを考えると子どもにとっては大きすぎ遊びに工夫が生まれにくかった。大きさや形を扱いやすいものに加工して用意することで、また違った遊びに発展する可能性を秘めている。機会を見つけて遊びの環境の一つにしてみたい。

そして、何よりも大切なのは、子どもの心に寄り添い物事に対しての意欲をもたせる教師のかかわりであると改めて感じた。

今後も、子どもの心に寄り添いながら感動を共にし、さまざまなものにかかわる体験や楽しいこと不思議なことなどが揺さぶられる体験を積み重ねていきたい。

<引用文献>

- 1) 森上史朗：「4歳児の世界」, 森上史朗編, p10, 1986, 世界文化社。